安史の乱における周辺諸国の動向

——ウイグル・吐蕃・于闐・抜汗那・吐火羅・大食・南蛮・契丹・奚・南詔・党項・渤海・新羅・日本——

菅沼愛語

はじめに

安史の乱（七五五～七六三）は、唐王朝に一時壊滅的な打撃を与えたのみならず、東部ユーラシア全体の歴史に大きな影響を与えた大乱であった。この乱を契機に、世界帝国であった大唐帝国は半壊し、以後、節度使（藩鎮）の自立に苦悩する東アジアの一勢力に後退してしまった。その結果、東部ユーラシアは大まかには唐・西方の吐蕃・北方の新興国ウイグルという三勢力が鼎立する構図へと変化し、その状態が一世紀近く続いていく。

安史の乱については、これまで多くの研究者により様々な角度から研究されてきた。例えば、プーリィブランク氏、谷川道雄氏、藤善真澄氏ら[1]は、主として唐側から乱の性格や政治背景などを考察している。佐藤長氏、森安孝夫氏、古畑徹氏ら[2]は、安史の乱の国際的な側面について論考している。また最近では、森安孝夫氏、森部豊氏ら[3]が、唐の中の外国人勢力という観点から安史の乱を分析している。

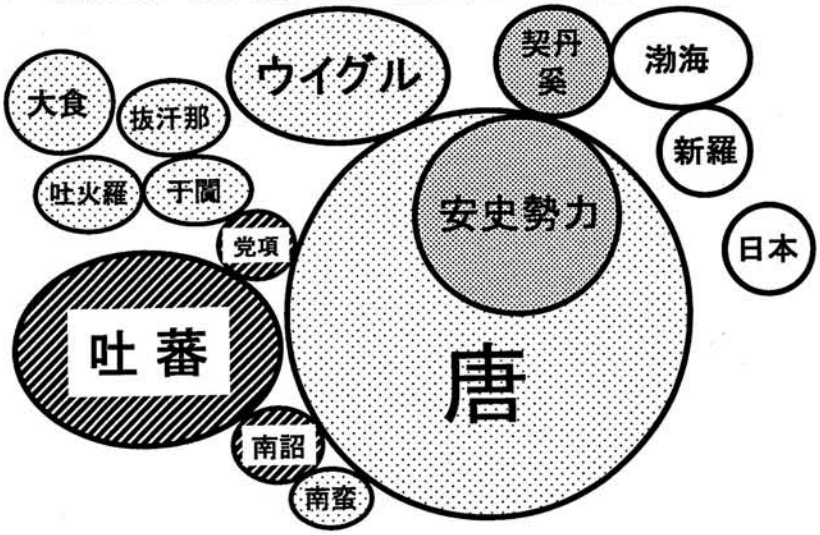
本稿では、これら優れた先行研究の成果を踏まえつつ、安史の乱の前後の唐と周辺諸国の国際関係に注目し、『旧唐書』『新唐書』『冊府元亀』『資治通鑑』等の中国側の漢文史料及び『三国史記』（朝鮮）『続日本紀』（日本）等の各国史料も用いて、安史の乱における周辺諸国の動向について確認され得る事実を抽出し整理分析していく。尚、これら多くの諸史料から関連事項をまとめた年表や図表等は、それ自身「安史の乱での周辺諸国の動向」を概観する上での基礎データとしても一定有用であると考える。

まず筆者が注目したのは、安史の乱自身が、唐王朝の内乱という性格に加えて、東部ユーラシアの大乱としての国際的な性質も帯びており、事実、唐の周辺諸国の多くが、この大乱に参与しているという点である。ウイグル・于闐（ホータン）・抜汗那（フェルガナ）・吐火羅（トカラ）・大食（アラブ）等の西方諸国、南方の南蛮は援軍を派遣して唐を支援し、北東アジアの契丹・奚は安史陣営に加担して兵力を提供するなど、東部ユーラシア諸国の多くが安史の乱に直接的に関わっている。これらのうち、とりわけ重要な役割を果たしたのがウイグルであり、唐に加勢して安史陣営との重要な戦い（長安奪還戦・二度の洛陽奪還戦・史朝義討滅戦等）に参戦し乱を終息へと導いた。この間、西方の吐蕃も南詔・党項を誘って、唐が乱の平定に専念している隙に

唐の西方や西南辺に侵攻して領土を拡張するなど軍事行動を起こしている。安史の乱における東部ユーラシア諸国の参戦状況と国際関係の概観については〔図〕にまとめた。

東方の渤海・新羅・日本については、親唐的な中立を保っていたが、渤海に対しては唐側と安史側の双方が使者を派遣し自陣営に取り込もうとし、日本に対しても唐から軍需品の調達が要請されるなど、乱に付随して活発な外交交渉も見られた。また、安史の乱の余波でこれら東方の三国間にも緊張関係が生じている。

〔図〕安史の乱における東部ユーラシア諸国（諸勢力）の国際関係の概略図。
薄い影は実際に戦いに参加した親唐勢力、濃い影は安史側の勢力を表す。
斜線の吐蕃・南詔・党項は、乱の混乱に乗じて唐に侵攻した勢力。



安史の乱の際の周辺諸国の対応は大まかに四つのタイプに分類できる。即ち、ウイグル・于闐・抜汗那・吐火羅・大食・南蛮のように唐を軍事的に直接支援したタイプ、渤海・新羅・日本のように親唐的な中立を守ったタイプ、契丹・奚のように安史陣営に兵力を提供したタイプ、吐蕃・南詔・党項のように第三勢力として独自の軍事行動により領土拡張を画策したタイプ、の四つである。

これらの分類は、地理的な分類とおよそ符合している。安史陣営の拠点は、唐の北東辺（范陽・平盧・河東）であり、安史側に属した契丹・奚は安史陣営に隣接し、その勢力圏であった。一方、乱の際に、唐に対して援軍を派遣した国は、その多くが歴史的に唐との繋がりが深く、北方のウイグルを除けば、于闐・抜汗那・吐火羅・大食などの西方諸国、南方の南蛮と、いずれも安史勢力から離れた地域である。また、親唐的な中立を保った渤海・新羅・日本は、歴史的に唐との親和性は強いが、アジアの北東部に位置する為、唐への支援は安史陣営によって阻まれる形となった地域である。両陣営に与せず領土拡張を行った吐蕃・南詔は、それまで唐と度々衝突し反唐的色彩を帯びるものの、東部ユーラシアの南西部に位置する為、安史勢力からは遠く連繋は難しい。この様に、安史の乱の際の周辺諸国の外交姿勢は概ね、唐との歴史的親和性と地理的要素から規定されており、歴史的な経緯を踏まえ地理的な制約の下で具体的に発現したと考えられる。

この様に、安史の乱は、東部ユーラシア諸国のかなりの部分を巻き込んでおり、一面では、国際的な戦争としても位置づけられる。安史の乱および周辺諸国の動向の全体像については〔年表1〕に簡潔にま

〔年表１〕安史の乱と周辺諸国の動向

年代	安史の乱の主要事項と周辺諸国の動向	唐帝	安史側
天寶14 (755)	11月　安祿山が挙兵【**安史の乱が勃発**】 12月　安祿山が洛陽占領	玄宗	安祿山
天寶15 /至德 元 (756)	正月　安祿山が洛陽で大燕皇帝に即位 ６月　安祿山が潼関を奪取、玄宗は蜀に逃走。馬嵬の変。安祿山が長安占領 ７月　粛宗が霊武で即位して至徳と改元 ８月　ウイグルと吐蕃が粛宗に遣使し援軍の派遣を申し出る ９月　粛宗がウイグルに遣使して援軍を請願 10月　①ウイグル騎兵２千が范陽（安祿山の本拠地）を攻撃 11月　②郭子儀とウイグルが協力して河曲を平定 この年、吐蕃が、河西・隴右で威戎・神威・定戎・宣威・制勝等の諸軍、石堡城・百谷城・雕窠城の諸要塞を陥落させる この年、安祿山と通謀した平盧留後事の徐帰道が渤海に遣使し、安祿山討伐の為と称して援軍派遣を要請するが、渤海は徐帰道の謀反を疑い使者を抑留	玄宗 ↓ 粛宗	
至德２ (757)	正月　安慶緒が安祿山を殺害して即位 ９月　③広平王（後の代宗）が朔方等の諸軍、ウイグル・西域・大食・南蛮の援軍を率いて安慶緒軍を撃破し、**長安を奪還** 10月　④唐軍（ウイグル等も参戦）が安慶緒軍に勝利し、**洛陽を奪還** 安慶緒は河北に撤退し、12月には史思明が唐に降伏	粛宗	安祿山 ↓ 安慶緒
乾元元 (758)	６月　史思明が再度反乱を起こす ７月　粛宗が葛勒可汗を英武威遠毗伽可汗に冊立。寧国公主が降嫁 ８月　ウイグルの援軍（騎兵３千）が到来 ９月　粛宗が郭子儀ら９人の節度使に安慶緒討伐を命令し、河北に派遣 この年、安東都護の王玄志が、粛宗の勅書を携えた使者を渤海に派遣して皇帝の帰京等を伝えたが、渤海は王玄志の言葉を信用せず、使者を抑留 この年、渤海が日本に「安史の乱」の情報を伝える		安慶緒
乾元２ (759)	正月　史思明が魏州で燕王に即位 ３月　⑤相州の戦い。唐軍（ウイグルも参戦）が史思明に敗北 ３月　相州で唐軍に勝利した史思明は安慶緒を殺害し、４月に大燕皇帝に即位 ４月　ウイグルの葛勒可汗が死去し、８月に寧国公主が唐に帰国 ９月　史思明が洛陽を再占領 この年、日本で「新羅征討計画」が立案される		安慶緒 ↓ 史思明
上元２ (761)	３月　史朝義が史思明を殺して即位 この年、粛宗が日本に軍需品（弓造りの為の牛角）の調達を要請		史思明 →朝義
宝応元 (762)	正月　唐と吐蕃が長安で会盟（宝応会盟） ４月　玄宗と粛宗が相次いで崩御し、代宗が即位。この後、史朝義がウイグルと渤海に遣使し懐柔を図る。ウイグルの牟羽可汗は史朝義に呼応して唐への侵攻を開始。渤海は史朝義に呼応せず ９月　代宗がウイグルに遣使し援軍を要請。使者は、唐に侵攻中の牟羽可汗と遭遇。代宗は可汗を説得し、唐とウイグルは史朝義討伐の為に連合 10月　⑥唐・ウイグル連合軍が史朝義を撃破し、**洛陽奪還** 11月　⑦貝州の戦いで唐軍とウイグル軍が史朝義を撃破（史朝義討滅戦）	粛宗 ↓ 代宗	史朝義
広徳元 (763)	正月　史朝義自殺【**安史の乱が終息**】 正月　渤海が日本に唐の情報を伝える 10月　吐蕃軍が長安を15日間占領	代宗	

※①～⑦は、ウイグル等の周辺国家からの援軍が参戦した戦い

とめておく。

安史の乱において周辺諸国が唐に援軍を送り参加した戦いは、漢文史料によると七回認められる。これら周辺諸国が参加した七つの戦いについては〔表1〕、戦いが行われた場所については〔地図1〕に各々まとめた。これらの戦いについては第二章で詳しく取り上げるが、その概要は以下の通りである。

至徳元載（七五六）、粛宗の求めに応じ、ウイグルの葛勒可汗が援軍を唐に派遣した。このウイグル軍は、安禄山の本拠地范陽（現北京）と河曲（内モンゴル自治区の一部と陝西省・寧夏回族自治区の北辺）[4]で各々安禄山の軍勢と対峙した。この後、唐は至徳二載（七五七）九月、ウイグル・西域（于闐・抜汗那）・南蛮・大食の援軍と共に再度安慶緒の軍勢を撃破して長安を奪還し、十月に前述の援軍と共に再度安慶緒の軍勢を撃破して洛陽を奪還した。唐が両京を奪還後、安慶緒は河北に逃走して相州（河南省安陽県）に籠城した為、唐は乾元元年（七五八）九月より九人の節度使が率いる二十万の軍勢を相州に派遣して安慶緒を攻撃した。この戦いにはウイグルの援軍三千も参戦したが、乾元二年（七五九）三月に行われた相州の戦いで唐は敗北する。その後、唐は史思明に洛陽を奪われるが、ウイグルと連合し、宝応元年（七六二）十月、史朝義を撃破して洛陽を奪回する。敗残の史朝義は河北に逃走するが、唐・ウイグル連合軍はこれを追撃し、宝応元年十一月、貝州（河北省）で史朝義を撃破した。

以上の周辺諸国が唐を支援した七回の戦い全てにウイグルは参加しており、安史陣営との重要な戦いにも貢献して唐を勝利へと導き、褒賞として唐から名（可汗冊立・公主降嫁）と実（褒賞として大量の絹など）の双方を獲得して漠北の大国となった。

周辺諸国の唐側への加勢に関連して、援軍を派遣した諸国については〔表2〕、来援した諸国に対する唐の褒賞については〔表3〕、唐・ウイグル間の婚姻関係と名分関係については〔表4〕に各々まとめた。

一方、西方の大国である吐蕃は、安史の乱の際に幾分奇妙な行動をとっており、唐側でも安史側でもなく、第三勢力的に自己の権益に沿う形でこの大乱に参与している。吐蕃は、唐に二度も使者を送り援軍の派遣を申し出る一方で、唐の混乱に乗じて南詔・党項と共に唐の西方や西南辺を侵し河西・隴右を占領した。これに対し、唐は吐蕃と宝応会盟（宝応元＝七六二）を結んで和睦したが、吐蕃軍の東進は止まらず、乱の終息直後の広徳元年（七六三）十月には、長安が吐蕃軍に十五日間も占領されてしまう。吐蕃は安史の乱後も軍事外交的に唐王朝を圧迫し、最終的には徳宗時代の建中会盟（建中四＝七八三）により占領地である河西・隴右の領有を唐に認めさせている。安史の乱前後の唐・吐蕃間の和戦の推移については〔年表2〕に、安史の乱の時の吐蕃軍の占領地については〔地図2〕に各々まとめた。

本稿は四章で構成されている。第一章では安史の乱勃発前後の唐の外交政策と周辺諸国の情勢について簡潔にまとめ、第二章では安史の乱の展開をウイグルの寄与を中心的な視座としてまとめ考察を加える。第三章ではウイグルと吐蕃以外の周辺諸国の動向をまとめ、吐蕃については第四章で考察する。尚、本稿は漢文史料に基づき陰暦で記載する。また、引用史料の訳及び傍線は筆者が附した。

第一章　安史の乱前後の唐の対外政策

本章では、安史の乱に至るまでの唐の外交戦略や乱が勃発した直後の唐の情勢を概観する。まず第一節で安史の乱勃発直前（七五〇年代前半）の唐の対外戦略[5]を簡単にまとめ、第二節で乱勃発直後の唐の対応や反撃体制について見ていく。

（一）安史の乱勃発直前の唐の外交政策

七四〇年代の唐の外交戦略の主眼は、北方の突厥を滅ぼす事と、西方の吐蕃をチベット高原に封じ込める事にあった。七四三（天寶二）～七四四年（天寶三）、突厥の周辺諸族バスミル・カルルク・ウイグルが突厥を攻撃した時、唐はバスミルやウイグルを支援した。その結果、突厥は七四四年、ウイグルに滅ぼされた。また唐は、吐蕃の中央アジアへの進撃路であった青海とパミールを掌握する事で、吐蕃の侵攻を食い止めた。だが、七五〇年頃より唐の外交戦略には政治的・外交的なビジョンがなくなり、前線将軍である節度使達（安禄山〔平盧・范陽・河東の三節度使を兼任〕、楊国忠〔剣南節度使〕）も目先の栄達に捉われ、周辺国家に対して無定見な戦争を仕掛ける等、無秩序な対外政策を取るようになった。七五一年（天寶十）には、唐軍が、南方の南詔、西方の大食、北方の契丹との戦いに各々大敗し、唐の対外政策に大きな破綻が生じた。とりわけ唐は七五一～七五四年の南詔遠征で二十万もの兵力を喪失し、親唐的だった南詔を吐蕃に寝返らせてしまうなど外交的にも失敗した。

また、安史の乱の際、唐に加勢して乱を終息へと導く功労者ウイグルは、乱が勃発する十九年前（天寶三載〔七四四〕）、突厥を滅ぼしてモンゴル高原に建国した[6]。建国後から安史の乱勃発前までのウイグルは、毎年の様に唐に遣使し（『新唐書』巻二一七回鶻伝、『冊府元亀』巻九七一）、入寇していない[7]。安史の乱の時、唐に援軍を派遣するのは二代目の葛勒可汗[8]（在位は天寶六〔七四七〕～乾元二〔七五九〕）と三代目の牟羽可汗[9]（在位は乾元二～大暦十四〔七七九〕）である。葛勒可汗は古代トルコ語の紀功碑シネウス碑文を残しており、同碑には可汗が即位直後よりカルルク等の周辺諸族に遠征を繰り返していた事が記されている[10]。建国当初のウイグルは北方の遊牧諸族の間で覇権を確立する事に重点を置き、唐との親善外交を目指していたと推察される。

（二）安史の乱勃発直後の唐

天寶十四載（七五五）十一月、安禄山は、范陽・平盧・河東の節度使としての兵力のみならず、同羅（トルコ系民族）、契丹、奚、室韋（以上は北東アジアの諸族）といった周辺諸族の軍勢も従え、二十万と号する大軍でもって范陽（現北京）において反乱を起こした（『資治通鑑』巻二一七）。安禄山は十二月には洛陽を占領し、翌年（天寶十五載＝七五六）正月、洛陽で大燕皇帝に即位した。これに対し、玄宗は、安禄山の西進を阻止するため河西・隴右節度使の哥舒翰に潼関を守備させ、朔方節度使の郭子儀に安禄山の本拠地河北を攻略させた。郭子儀は天寶十五載（七五六）六月、史思明を撃破して河北の十餘郡を奪還したが、同じ六月、哥舒翰が安禄山に大敗し、潼関を安禄山に奪われた。潼関の陥落後、唐側の不利は決定的となり、玄宗は長安を放棄して蜀に逃亡した。

この時、皇太子は玄宗と別れ、郭子儀の本拠地霊武（寧夏回族自治

区）に逃れた。太子は朔方節度大使を務めた経験があり、朔方軍の幕府に知己が多かったため朔方を避難先に選んだのである（『資治通鑑』巻二一八）。また、朔方軍が精強であった事、郭子儀が忠義の名将である事などからも、太子は同地での再起を図ったと思われる。郭子儀は、天寶十五載（七五六）二月より河東節度使の李光弼と共に安禄山の本拠河北に進撃中であったが、郭子儀の副官杜鴻漸が太子を霊武に迎え入れた。天寶十五載（七五六）七月、太子は霊武で即位して粛宗となり、至徳と改元した。粛宗の主たる関心事は長安の奪還にあった(11)（『旧唐書』巻十粛宗紀）ため、即位直後、河北を攻略中だった郭子儀を霊武に帰還させた（『旧唐書』巻一二〇郭子儀伝）。粛宗はまた、河西節度副使の李嗣業に五千の兵を率いて霊武に来るよう命じた（『資治通鑑』巻二一八）。河西の軍隊は先述の様に潼関防衛戦で安禄山に大敗し、壊滅的打撃を被ったが、粛宗は残存戦力を徴集するよう命令したのである。粛宗は、更に西方の安西（クチャ）に対しても徴兵を命令した（『資治通鑑』巻二一八）。

粛宗即位の翌月の至徳元載（七五六）八月にはウイグルと吐蕃が粛宗に遣使し、唐を助けて安禄山を討伐したいと申し出た（『旧唐書』粛宗紀、『資治通鑑』巻二一八）。粛宗は、ウイグルに対してのみ援軍派遣を要請し、吐蕃に対しては援軍の派遣を要請しなかった。この後、至徳元載九月、粛宗は抜汗那（フェルガナ）に対し、西域諸国を廻って援軍を要請するよう命令した（『資治通鑑』巻二一八）。また、至徳元載末頃には、于闐（ホータン）王の尉遅勝が自ら五千の兵を率いて来援した（『新唐書』巻二二一下于闐伝(12)、『資治通鑑』巻二一九）。

以上の様に、粛宗は朔方・河西・安西といった唐の西北及び西方の節度使の軍隊を徴集し、ウイグル・抜汗那・于闐等の北方・西方の国々に援軍を依頼した。粛宗の行在が西北辺にあった事、長安奪還が目的だった事から、粛宗は西北や西方の軍勢を動員したと考えられる。

第二章　安史の乱の経過と周辺諸国の寄与
―ウイグルを中心に―

本章では、周辺諸国の援軍の寄与を中心に据えつつ安史の乱の経過を考察する。周辺国の援軍が参戦した安史の乱での七つの戦いについては〔表1〕、戦いが行われた場所については〔地図1〕、周辺国の援軍については〔表2〕、唐から周辺諸国への褒賞については〔表3〕、唐・ウイグル間の婚姻関係・名分関係については〔表4〕に各々まとめたので参照されたい。

（一）ウイグルへの援軍の要請と緒戦でのウイグル軍の活躍

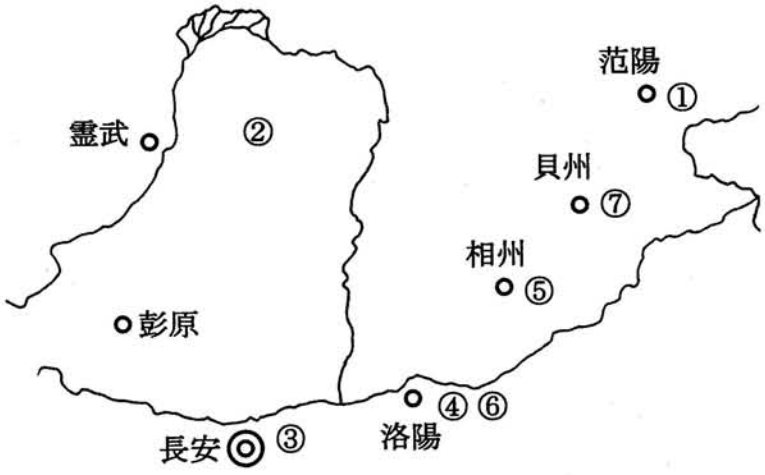
至徳元載（七五六）九月、粛宗は敦煌王承寀と朔方兵馬使の僕固懐恩（鉄勒人）をウイグルに派遣し、葛勒可汗に援軍を請願した。葛勒可汗は粛宗の要請に応じ、唐に軍勢を派遣するが、この時、娘（妻の妹）を承寀に嫁がせて唐王室との親善を図り、粛宗も、承寀の妻を毗伽公主に冊立して可汗との親睦を深めた（『旧唐書』粛宗紀・巻一九五廻紇伝、『新唐書』回鶻伝）。来援したウイグル軍は、まず安禄山の本拠范陽を襲撃し、その後、郭子儀と共に阿史那従礼（安禄山の部下）の軍勢を撃破し、河曲（内モンゴル自治区の一部と陝西省・寧夏回族自治区の北辺）を平定した。以下に二つの戦いにおけるウイグル軍の戦闘の詳細と意義について考察する。

〔表１〕周辺諸国の唐への援軍が参戦した安史の乱での７つの戦い

	時期	戦闘名	戦いの経過	参戦国	戦いの後の展開	史料
1	至徳元（756）10月	ウイグル騎兵の范陽襲撃	ウイグル騎兵２千が単独で安禄山の本拠范陽（現北京）を襲撃	ウイグル	江淮に進撃中の尹子奇（安禄山の部下）が范陽に帰還	『旧』200史思明伝、『通鑑』219
2	至徳元（756）11月	河曲平定戦	朔方節度使の郭子儀とウイグル軍が、粛宗の行在の攻撃を図る阿史那従礼（安禄山の部下）を撃退		河曲を平定。戦勝後、郭子儀は両京奪回のため河東攻略に着手	『旧』120郭子儀伝、『通鑑』219
3	至徳２載９月	**長安奪回戦**	唐軍がウイグル・西域・大食・南蛮の援軍と共に安慶緒軍を撃破	ウイグル・西域・大食・南蛮	**唐は長安を奪還**	『旧』195迴紇伝、『新』217回鶻伝、『通鑑』220
4	至徳２（757）10月	**洛陽奪回戦**			**唐は洛陽を奪還**。安慶緒は河北に撤退し史思明は唐に降服	
5	乾元２（759）３月	相州の戦い：安慶緒討伐	郭子儀ら９節度使がウイグル等の援軍と共に相州（河南省）で史思明と戦うが、敗北	ウイグル・（吐火羅・西域九国）	史思明は相州で唐軍に勝利後、安慶緒を殺害して大燕皇帝に即位し、洛陽を占領	『旧』迴紇伝、『新』回鶻伝、『通鑑』221
6	宝応元（762）10月	**２度目の洛陽奪回戦**	唐・ウイグル連合軍が史朝義を撃破	ウイグル	唐は**洛陽を奪還**。史朝義は本拠地范陽に向けて遁走	『旧』迴紇伝、『通鑑』222
7	宝応元（762）11月	貝州の戦い：**史朝義討滅戦**	貝州（河北）の戦いで、ウイグルの軽騎が唐軍に加勢して史朝義を撃破		敗北した史朝義は范陽に逃走するが進退窮まって自殺し「安史の乱」は終息	『旧』121僕固懐恩伝・迴紇伝、『新』224僕固懐恩伝、『通鑑』222

※略号：『旧』＝『旧唐書』、『新』＝『新唐書』、『通鑑』＝『資治通鑑』

〔地図１〕周辺諸国の唐への援軍が参戦した安史の乱での７つの戦い



①ウイグル騎兵２千の范陽攻撃：至徳元（756）10月
②河曲平定戦：至徳元（756）11月　⑤相州の戦い：乾元２（759）３月
③長安奪回戦：至徳２（757）９月　⑥２度目の洛陽奪回戦：宝応元（762）10月
④洛陽奪回戦：至徳２（757）10月　⑦貝州の戦い：宝応元（762）11月

〔表２〕周辺諸国の唐への援軍

国名	援軍の派遣	史料
ウイグル	至徳元（756）10月　ウイグル騎兵２千が范陽を攻撃。至徳元載11月、ウイグル軍が郭子儀と協力して河曲を平定	『旧』（＝『旧唐書』）120郭子儀伝・200史思明伝、『通鑑』（＝『資治通鑑』）219
	至徳２（757）９月～10月　ウイグルの葉護太子が４千の騎兵を率い唐軍と共に安慶緒軍を撃破して長安と洛陽を奪還	『旧』10粛宗紀・195廻紇伝、『新』（＝『新唐書』）217回鶻伝、『通鑑』220
	乾元元（758）葛勒可汗が、骨啜特勤・帝徳に驍騎３千を率いさせて安慶緒討伐に派遣	『旧』廻紇伝、『新』回鶻伝、『通鑑』221
	宝応元（762）10月、牟羽可汗が唐軍と共に史朝義を撃破し、洛陽を奪還。敗残の史朝義は自殺し、安史の乱は終息	『旧』廻紇伝、『新』224僕固懐恩伝、『通鑑』222
于闐（ホータン）	至徳元（756）王の尉遅勝が弟に国事を任せ、自ら五千の兵を率いて来援	『旧』144尉遅勝伝・198于闐伝、『新』110尉遅勝伝・221于闐伝、『通鑑』219、『冊府元亀』973
抜汗那（フェルガナ）	至徳元（756）９月、粛宗が抜汗那に対し、西域諸国を廻って援軍を要請するよう命令	『通鑑』218・219
大食（アラブ）	至徳２（757）９月～10月、唐軍と共に安慶緒軍を撃破して長安と洛陽を奪還。中央アジアの反アッバース朝勢力の軍勢	『旧』粛宗紀・198大食伝、『新』221大食伝、『通鑑』219、『冊府元亀』973、稲葉穣「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」（注(23) 論文）
南蛮	至徳２（757）９月～10月、唐軍と共に安慶緒軍を撃破して長安と洛陽を奪還	『旧』粛宗紀、『冊府元亀』973
吐火羅（トカラ）	乾元元（758）７月、吐火羅葉護の烏利多が西域九国と共に兵を派遣し、唐を助けて賊を攻撃したいと請願	『旧』粛宗紀、『新』221吐火羅伝、『冊府元亀』973、『唐会要』99吐火羅伝

〔表３〕唐からの周辺諸国への褒賞

国名	唐からの褒賞	褒賞の理由	史料
ウイグル	毎年絹２万匹を授与する事を約束、葉護太子を司空・忠義王となす。寧国公主（粛宗娘）の降嫁、葛勒可汗の冊立	至徳２（757）４千のウイグル騎兵が長安・洛陽を奪還したため	『旧唐書』廻紇伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』
	乾元２（759）３月、骨啜特勤・帝徳らに賞物を下賜し、骨啜特勤を銀青光禄大夫鴻臚卿員外置に任命	ウイグル驍騎３千が安慶緒討伐に協力し相州の戦いで唐に加勢したため	
	牟羽可汗に絹二百段を下賜。広徳元（763）７月、可汗を冊立。可汗・可敦・左殺・右殺・都督・宰相に実封２千戸を追加。左殺を雄朔王、右殺を寧朔王、胡禄都督を金河王、抜覧将軍を静漠王に封じ、都督11人を全て国公に封じる	宝応元（762）10月、牟羽可汗が唐軍に加勢して史朝義を撃破して洛陽を奪還するなど安史の乱平定に多大な貢献をしたため	
于闐（ホータン）	至徳元（756）王の尉遅勝に特進・殿中監、広徳中（763～764）驃騎大将軍・毗沙府都督・于闐王を各々拝し、上元元（760）、勝の弟曜を同四鎮節度副使・権知本国事となす	至徳元、尉遅勝が自ら５千の援軍を率いて来援したため	『旧』『新』尉遅勝伝・于闐伝、『通鑑』219・221
西域諸国	至徳元（756）厚い褒賞を約束して西域諸国に援軍要請	来援に対する褒賞	『資治通鑑』218

〔表４〕唐・ウイグル間の婚姻関係及び名分関係

婚姻及び名分	内容	理由	史料
敦煌王承案とウイグル可汗の娘が結婚	至徳元（756）援軍要請のため敦煌王承案がウイグルに赴いた時、葛勒可汗が承案に娘（可汗の妻の妹）を娶らせた。粛宗は彼女を毗伽公主に冊立	唐王室とウイグル可汗の親善強化のため	『旧唐書』廻紇伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』
広平王と葉護太子が兄弟の契りを結ぶ	至徳２（757）９月、粛宗が広平王（唐軍総帥、後の代宗）と葉護太子（ウイグル軍総帥・ウイグル軍を率いて来援）に兄弟の契りを結ぶよう命令	唐軍とウイグル軍の親睦強化め両軍の総帥が兄弟の契りを結ぶ	
寧国公主（粛宗の娘）が葛勒可汗に降嫁	乾元元（758）７月、葛勒可汗の要請に応じ、粛宗は次女の寧国公主を可汗に嫁がせる	葛勒可汗は援軍派遣・両京奪還の褒賞として、唐との婚姻を要請。粛宗もウイグルへの褒賞としてこれに応じた	
牟羽可汗と僕固懐恩の娘が結婚	葛勒可汗が少子の移地健（後の牟羽可汗）の為に婚姻を請願。粛宗は僕固懐恩の娘を移地健に嫁がせる		

（1）ウイグル騎兵二千による范陽攻撃（至徳元載十月）

至徳元載十月、ウイグル騎兵二千が安禄山の本拠范陽を攻撃した。これに対し、范陽が二日間城門を閉じて抗戦した為、ウイグル騎兵は同地を攻略できず太原（山西省）に移動した。この時、安禄山の部下尹子奇は黄河を渡って青州（山東省）に至り、江淮（江蘇省・安徽省）への進撃を試みていたが、ウイグル騎兵の范陽襲撃を知って南下を断念し、救援の為に急遽范陽に帰還した（『旧唐書』巻二〇〇史思明伝、『資治通鑑』巻二一九）。

范陽攻撃は先述の様に郭子儀と李光弼が西方から試みたが、粛宗の帰還命令によって両将が撤退した為、河北は史思明に再占領された。また、平盧節度使の劉正臣は北方（営州〔遼寧省〕）から范陽襲撃を画策したが、史思明に迎撃され、北からの范陽攻略も失敗していた（『資治通鑑』巻二一七・巻二一八）。騎兵二千という身軽さが行軍を迅速にし、ウイグル軍の快進撃を容易にしたと思われる。ウイグルの范陽攻略は失敗したが、特筆すべき点は、この攻撃によって安禄山の江淮への進撃が阻止された事である。ウイグルは、唐の経済基盤であった江淮地方も守った事になる。政治的中枢の喪失に経済的な基盤の麻痺が加われば、唐は破滅的であっただろう。それ故、ウイグルの范陽攻撃は戦局に対して意義深いものであった。

（2）郭子儀・ウイグル連合軍の河曲平定戦（至徳元載十一月）

至徳元載十一月、安禄山の部下阿史那従礼は、同羅・僕骨の騎兵五千、河曲の九府・六胡州の軍勢数万を率いて、粛宗の行在[13]（彭原〔甘粛省〕）の襲撃を図った。郭子儀はウイグル軍と共に阿史那従礼の軍勢を撃破し、河曲を平定した[14]（『旧唐書』郭子儀伝）。戦勝後、郭子儀は洛交（陝西省）に南下し、河東の奪還を試みた。河東は長安と洛陽の間に位置する為、郭子儀は河東を掌握して両京を攻略しようと計画したのである（『資治通鑑』巻二一九）。ウイグルの貢献は、長安と洛陽を奪還する為の重要な布石になったのである。

（二）長安・洛陽の奪回戦〔表1〕〔地図1〕

至徳二載（七五七）正月、安西・北庭の軍勢と抜汗那・大食諸国の援軍が涼州（甘粛省）・鄯州（青海省）に到着した為、粛宗は保定（甘粛省）に移動した。粛宗は二月には鳳翔（陝西省）に至り、隴右・河西・安西・西域の軍勢と合流した（『資治通鑑』巻二一九）。

唐がこの様に着々と反撃体制を整えている頃、洛陽の安禄山陣営では内訌が起こり、至徳二載正月、安禄山が息子の安慶緒に殺された。太原を攻囲中だった史思明は、安禄山の死を知ると范陽に撤退した為、至徳二載二月、郭子儀は河東を掌握した。

至徳二載九月、ウイグルの葉護太子（葛勒可汗の長男）が四千のウイグル騎兵を伴って鳳翔に到来し、唐軍は更に強化された。粛宗は、唐軍の元帥である広平王（後の代宗）と葉護太子に兄弟の契りを結ばせた。また、粛宗はウイグル軍に対し、一日に羊二百口、牛二十頭、米四十斛を供給した。更に、一日も早い長安奪還を希望する粛宗は、葉護太子に対し「長安を奪還した暁には、土地と人民は唐に帰し、金帛と子女はウイグルに帰す」と約束した（『旧唐書』廻紇伝、『資治通鑑』巻二二〇）。ウイグルへのこうした破格の待遇は、唐が前年のウイグル軍の二度の戦果（范陽攻撃と河曲平定）を評価し、長安奪回戦でもウイグル軍の善戦を期待した事によると考えられる。ウイグル軍が到来後の九月丁亥、広平王は朔方・安西等の諸軍、ウイグル・西

域・南蛮・大食の援軍、併せて二十万を率いて鳳翔を出撃し、九月壬寅、長安の西に陣を張った（『旧唐書』粛宗紀、『資治通鑑』巻二二〇）。

（1）長安奪回戦（至徳二載九月）

安慶緒軍十万は、唐の陣営の北に陣を張り、唐軍の東に精騎を伏せて背後から唐軍を襲撃しようとしたが、ウイグル騎兵が素早く安慶緒の伏兵を殲滅した。その後、唐軍とウイグル軍は協力し、唐軍が前方から、ウイグル騎兵が後方から安慶緒軍を挟撃し、大いに打ち破った。唐軍は、安慶緒軍六万を斬首し、大勝して長安を奪還した（『旧唐書』巻一〇九李嗣業伝・巻一二〇郭子儀伝・迴紇伝、『冊府元亀』巻九七三外臣部助国討伐、『資治通鑑』巻二二〇）。

戦勝後、ウイグルの葉護太子は粛宗の約定を理由に長安を略奪しようとしたが、広平王が説得して阻止した為、葉護は長安城外に移動し、滻水（長安の東）の東側に陣営を築いた（『旧唐書』迴紇伝、『資治通鑑』巻二二〇）。西域・南蛮・大食の軍勢も、滻水の東に陣地を築いた（『資治通鑑』巻二二〇、『冊府元亀』巻九七三）。唐軍は長安奪還後、洛陽に進撃した。

（2）洛陽奪回戦（至徳二載十月）

至徳二載十月、唐軍は曲沃（山西省臨汾市）に駐屯した。ウイグルの葉護太子は、谷中で安慶緒軍の伏兵を発見し、これを殲滅した。その後、唐軍は新店（河南省）に進撃するが、安慶緒軍が最初、山に拠って陣を築いた為、唐軍には不利であった。しかし、安慶緒軍が退却する唐軍を追撃して山を降り始めると、ウイグル騎兵がその背後から襲撃し、弓矢を浴びせた。安慶緒軍が驚いて潰走した為、唐軍とウイグル軍は前後から安慶緒軍を挟撃してこれを大破した（『旧唐書』李嗣業伝・郭子儀伝・迴紇伝、『資治通鑑』巻二二〇）。

勝利した唐軍は洛陽を奪還した。この時、ウイグルは府庫に入って財宝や絹を奪い、洛陽城内や付近の町村で三日間略奪した。それでも広平王は葉護太子に錦や宝を贈り、粛宗も絹や金銀を葉護に下賜した。更に、粛宗は葉護太子に対し、毎年絹二万匹を下賜する事を約し、太子を司空・忠義王となして、ウイグルの功績に報いた（『旧唐書』粛宗紀・迴紇伝）。

ウイグル騎兵は、長安奪回戦でも洛陽奪回戦でも両軍の戦局を左右する程、決定的な働きをした。援軍の中で戦いの詳細が史料に記載されているのもウイグルだけである。詳細な記録が残っている点からも、ウイグルの働きが他よりも抜きん出ていたと言えるかも知れない。

洛陽でも敗北した安慶緒は、長安に続いて洛陽も放棄して河北に撤退し、相州（河南省安陽県）に立てこもった。また、十二月、史思明は安慶緒を見限って唐に降伏した。

（3）援軍を派遣した国々に対する粛宗からの褒賞（至徳元～上元元）〔表3〕〔表4〕

唐が援軍を派遣した諸国に対して与えた褒賞について、詳細が分かっているのはウイグルと于闐である。唐はウイグルに対し、可汗の冊立、公主の降嫁、絹の下賜等を褒賞として与えた。即ち、粛宗は至徳二載十月、葉護太子に毎年絹二万匹を下賜する事を約束し、乾元元年（七五八）七月には葛勒可汗を英武威遠毗伽可汗に冊立して、次女の寧国公主を可汗に嫁がせた(15)。皇帝の実の娘が降嫁するのは、これが初めてであった。また、葛勒可汗が少子移地健（後の第三代可汗牟

羽）の為に婚姻を請願したので、粛宗は僕固懐恩の娘を移地健に嫁がせた（『旧唐書』廻紇伝）。尚、ウイグルは乾元年間（七五八～七五九）以降、唐と活発な絹馬交易も行うようになる[16]（『旧唐書』廻紇伝、『資治通鑑』巻二二四）。これだけ破格の褒賞を与えている事からも、ウイグルの働きが突出していた事、粛宗が今後もウイグルとの繋がりを期待した事などが推察できる。粛宗はまた、于闐に対する褒賞として至徳元載（七五六）、尉遅勝に特進・殿中監を拝し、上元元年（七六〇）には勝の弟曜を同四鎮節度副使・権知本国事とした（『資治通鑑』巻二一九・巻二二一）。抜汗那等の西域諸国に対しては、粛宗は徴兵前、厚い賞を与える事を約している（『資治通鑑』巻二一八）。

（三）史思明の再反乱と相州の戦いでの唐軍の敗北

（1）史思明の再反乱

安慶緒は洛陽放棄後、相州（河南省）に籠城した。また、史思明は至徳二載（七五七）十二月、唐に降伏したが、乾元元年（七五八）六月、唐が史思明の暗殺を画策した為、再び叛旗を翻した。粛宗は乾元元年九月、郭子儀（朔方節度使）・李光弼（河東節度使）を初めとする九人の節度使に安慶緒討伐を命じ、歩騎二十万を統率させて安慶緒の立てこもる相州に派遣した。この時、ウイグルや吐火羅（トカラ）も唐に援軍を派遣し、郭子儀の麾下で安慶緒討伐に参戦した。即ち、乾元元年七月、吐火羅が西域九国の首領と共に来朝し、唐を助けて安慶緒を討伐したいと申し出（『新唐書』巻二二一吐火羅伝[17]、『唐会要』巻九九吐火羅伝）、葛勒可汗も、八月、骨啜特勤と帝徳に驍騎三千を統率させて唐に派遣したので、粛宗は彼らを郭子儀の麾下に配属させた（『旧唐書』廻紇伝）。唐軍は、安慶緒の占領地であった魏州（河北省）等を奪還して戦果を挙げた。このため安慶緒は窮し、范陽の史思明に援軍を要請した。史思明は自ら十三万の軍勢を率いて南下し、魏州を奪還すると、乾元二年（七五九）正月、魏州で燕王に即位し、その後、相州の安慶緒と合流して郭子儀らの率いる唐軍と対峙した。

（2）相州の戦い（乾元二年三月）〔表1〕〔地図1〕

乾元二年三月、相州において郭子儀ら九人の節度使が統率する唐軍は史思明と対戦するが、敗北した（『旧唐書』粛宗紀、『資治通鑑』巻二二一）。この戦いにはウイグルの驍騎三千も参戦した（『旧唐書』廻紇伝、『新唐書』回鶻伝）。吐火羅と九国の援軍も参戦したと思われる。

相州の戦いに敗北した唐軍は洛陽に撤退し、ウイグルの骨啜特勤と帝徳は戦績のないまま長安に帰還した。粛宗は紫宸殿で宴を催して骨啜特勤らを労い、賞物を下賜し、骨啜特勤を銀青光禄大夫鴻臚卿員外置に任命しウイグルの支援に感謝した（『旧唐書』廻紇伝）。

（3）史思明及び史朝義の即位、葛勒可汗の死去と寧国公主の帰国

相州で唐軍に勝利した史思明は、安慶緒を殺害し、乾元二年四月、范陽で大燕皇帝に即位した。その後、史思明は九月には洛陽を再占領し、鄭州・滑州（以上河南省）も占拠した。史思明は、相州での勝利に勢いづいて進撃を続けたのである。粛宗にとって、史思明の洛陽占領は衝撃であった。その事は、粛宗が、史思明が洛陽を占領した翌月（乾元二年十月）に勅書を下して親征を試み、群臣に諫止された事からも推測される（『旧唐書』粛宗紀、『資治通鑑』巻二二一）。粛宗は上元二年（七六一）二月、洛陽の奪還を試みるが、ここでも史思明に大敗した。史思明は戦勝に乗じて潼関の突破も図ったが、唐軍はこれを撃退した。この後、唐軍に敗北した事などが原因で、史思明と息子

の史朝義が対立し、上元二年三月、史朝義が史思明を殺害して四代目の大燕皇帝に即位した。

安史陣営の内紛にもかかわらず、唐は宝応元年（七六二）十月まで史朝義との戦いに決定的勝利を収められず、戦線は膠着状態になったが、粛宗時代の唐は、相州での敗戦後、二度とウイグルに援軍を要請しなかった。ウイグルでは、相州の敗戦の翌月（乾元二年四月）、葛勒可汗が死去し、寧国公主は、可汗との間に子供がなかった為に唐への帰国を許され、乾元二年八月、長安に帰還した。葛勒可汗の死去と寧国公主の帰国によって緊密だった唐とウイグルの親善関係が弱まった為、粛宗はウイグルに援軍を請願しなかった可能性もある。

（四）唐・ウイグル連合軍と史朝義との最後の戦い〔表1〕〔地図1〕

唐と史朝義の対戦は膠着状態のまま続くが、宝応元年（七六二）、玄宗と粛宗が相次いで崩御すると、史朝義はウイグルと渤海に各々遣使し、ウイグルに対しては唐への入寇を教唆する。本節では、史朝義の画策、唐と史朝義の最後の戦い等について考察する。

（1）玄宗・粛宗の崩御と史朝義のウイグル・渤海への勧誘

宝応元年建巳月（四月）甲寅に玄宗、その十三日後の建巳月（四月）丁卯に粛宗が各々崩御した。粛宗崩御の二日後（四月己巳）、粛宗の長男広平王俶が即位し、代宗となった。史朝義は、玄宗と粛宗の崩御を反撃の好機と考え、ウイグルと渤海の懐柔を試みた。ウイグルは、これまで唐に加勢して安史陣営に打撃を与えてきた為、史朝義にとって、その去就は重大な関心事であった。また、渤海は史朝義政権の北東に隣接する関係上、やはりその去就が背後の脅威になりかねなかった。そこで史朝義は、ウイグルと渤海の懐柔を図ったと考えられる。

史朝義のウイグルへの遣使については『旧唐書』廻紇伝、[18]『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』巻二二二・宝応元年九月条、渤海への遣使については『続日本紀』巻二四・天平宝字七年（七六三＝広徳元）正月庚申条[19]に各々記載がある。これらによれば史朝義はウイグルと渤海に対し、玄宗と粛宗が相次いで崩御した事や、唐には皇帝がいない事などを伝え、更にウイグルには唐の府庫を収奪するよう唆している。実際には粛宗崩御の二日後に代宗が即位しており、唐は皇帝不在の状態ではなかったが、史朝義はウイグルと渤海に対して故意に代宗の即位を告げず、皇帝不在の偽情報を伝えて唐の政情不安を印象付け、ウイグル・渤海の自陣営への取り込みを画策したと思われる。渤海は史朝義の誘いに応じなかったが、ウイグルの新可汗牟羽（移地健）は史朝義の言葉を信じ、自ら十万の軍勢を率いて唐への侵攻を開始した。宝応元年九月、代宗が修好と援軍要請の為に中使の劉清潭をウイグルに派遣すると、劉清潭は朔方の三受降城（内モンゴル自治区）に侵攻してきた牟羽可汗と遭遇した。可汗は辺境防備の脆弱さを見て唐を侮り、単于都護府の府庫を収奪した。代宗は、牟羽可汗の妻が僕固懐恩の娘であった為、懐恩を派遣して可汗を説得し、可汗を味方に付けると、唐軍とウイグル軍は協力して史朝義を討伐する事となった（『旧唐書』廻紇伝、『新唐書』回鶻伝）。

（2）二度目の洛陽奪回戦（宝応元年十月）

唐軍は陝州（河南省）で牟羽可汗と合流すると、洛陽に進撃した。ウイグル軍は僕固懐恩と共に唐軍の先鋒を担い、戦闘開始前、史朝義の斥候を捕えて唐軍に献上した。史朝義の軍勢は柵を築いて堅守した

が、唐軍は驍騎とウイグル騎兵を柵の東北に派遣し、史朝義軍を前後から挟撃し大破した。敗北した史朝義は本拠地の范陽を目指して逃走を開始し、唐軍は洛陽を奪還した（『旧唐書』巻一二一僕固懐恩伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』巻二二二）。

（3）史朝義討滅戦・貝州の戦い（宝応元年十一月）

唐軍は、史朝義を追撃して鄭州・滑州・衛州・魏州等でこれを撃破した。史朝義が敗退を重ねると、配下の薛嵩・李抱玉・張忠志（李宝臣）は史朝義を見限って唐に降伏した。

宝応元年十一月、唐軍と史朝義は、貝州（河北省）で対戦した。この時、唐軍と史朝義は混戦状態になったが、ウイグル軍が加勢に駆けつけたため唐軍は奮い立ち、史朝義を大いに打ち破った（『旧唐書』僕固懐恩伝、『新唐書』巻二二四僕固懐恩伝、『資治通鑑』巻二二二）。貝州で大敗した史朝義は、更に莫州（河北省）に逃走し、同地で唐軍を迎え撃ったが大敗し、范陽に逃走した。

（4）史朝義の自殺と安史の乱の終息（広徳元年正月）

史朝義は北へ逃走を続け范陽に至るが、范陽が城門を閉じ入城を拒んだため進退窮まり、翌年の広徳元年（七六三）正月、自殺した。これにより七年余続いた安史の乱は終息する。

（5）代宗からウイグルへの褒賞（広徳元年）

代宗はウイグルに対する褒賞として、牟羽可汗に絹二百段を下賜し、広徳元年七月、可汗を冊立した。また代宗は、牟羽可汗・可敦・左殺・右殺・都督・内外宰相以下に、それぞれ実封二千戸を加え、左殺を雄朔王、右殺を寧朔王、胡禄都督を金河王、抜覧将軍を静漠王に封じ、都督十一人を全て国公に封じて功績に報いた（『旧唐書』廻紇伝、『新唐書』回鶻伝）。代宗もまた、粛宗と同様、ウイグル可汗に対して、その地の支配を承認したのである。

（五）ウイグル騎兵の働き

ウイグルは、長安・洛陽奪還戦（至徳二）、二度目の洛陽奪還戦（宝応元）、史朝義討滅戦（宝応元）といった重要な戦いに参戦して唐の為に善戦した。本節ではウイグルの兵力・戦闘兵種・戦闘方法に注目し、ウイグルが戦いの勝敗にどの程度貢献したかを検討する。

まず、ウイグル軍の兵力が判明する戦いとその戦力を以下に挙げると、至徳元載（七五六）十月、范陽を攻撃したのは二千の騎兵であり、至徳二載（七五七）九月に葉護太子が率いてきた軍勢は四千の騎兵、乾元元年（七五八）八月、骨啜特勤が率いる軍勢は三千の驍騎であった。この様に、兵力だけを見ればウイグルの援軍は多いとは言えない。例えば、至徳二載の長安・洛陽奪回戦に参陣したウイグル騎兵四千は、于闐の兵力五千よりも劣る。ウイグルの兵力が何故少ないのか、同時期のウイグル本国の状況を手がかりに考えてみる。既述した様に、シネウス碑文によれば葛勒可汗はカルルク等の周辺諸族との戦いに専念していた。また、葛勒可汗は乾元元年九月、キルギス人五万を破ったと粛宗に奏上している（『旧唐書』廻紇伝、『冊府元亀』巻九七六外臣部褒異三）。キルギス遠征に戦力を投入していた為、可汗が唐に派遣できる兵力は二千～四千程度だったのである。

次に、ウイグル軍の兵種について考察する。ウイグルは遊牧騎馬民族である為、派遣された援軍は主として騎兵であった。ウイグル騎兵は兵力こそ少なかったが、優れた機動力は戦いの勝敗を決定付けた。以下に、ウイグル騎兵の戦いぶりの分かる四つの事例をまとめた。

①至徳二載九月の長安奪回戦で、ウイグル騎兵は戦闘序盤、安慶緒軍の伏兵を素早く殲滅した。戦闘中には唐軍と連繋し、唐軍が前方から、ウイグル騎兵が後方から安慶緒軍を挟撃して撃破した。

②至徳二載十月の洛陽奪回戦で、ウイグル騎兵は戦闘序盤、安慶緒軍を背後より弓矢で攻撃してこれを潰走させ、その後、唐軍と連繋し、唐軍が前方から、ウイグル騎兵が背後から安慶緒軍を挟撃した。

③宝応元年（七六二）十月、二度目の洛陽奪回戦で、ウイグル騎兵は進撃の際には唐軍の先鋒を担い、戦闘直前に史朝義の斥候を捕縛した。戦闘中は、唐軍が前方から、ウイグル騎兵が背後から史朝義軍を挟撃した。

④宝応元年（七六二）十一月、貝州の戦いで、ウイグル騎兵は唐と史朝義が混戦しているところに助勢に駆けつけた。このため唐軍は奮い立ち、史朝義を大破した。

この様にウイグル騎兵は優れた機動力を活かし、急襲や背後からの攻撃によって敵軍に打撃を与えた。唐もまた、ウイグル騎兵の長所を理解し活用する事で敵軍を圧倒した[20]。安史陣営がウイグルを恐れていた点は、以下に挙げる三つの事例から窺い知れる。

①長安奪回戦の時、安慶緒軍の兵士はみな奚であったが、元々ウイグルを恐れていた為、ウイグル軍と遭遇すると、驚き、騒ぎたてた（『新唐書』巻二二五安慶緒伝）。

②洛陽奪回戦の時、ウイグル騎兵が安慶緒軍の背後から弓矢を浴びせると、安慶緒軍は驚き、背後をかえり見て「ウイグルが来たぞ」と言って潰走した（『資治通鑑』巻二二〇）。

③二度目の洛陽奪回戦の前、史朝義が部下に応戦方法を謀ると、阿史那承慶は「唐がもし漢兵のみで来たら戦うべきですが、ウイグルと共に来たら戦わずに撤退し、河陽で守って唐軍を避けるべきです。」と進言した（『資治通鑑』巻二二二）。

ウイグルの去就は戦争終盤においても重視され、唐も史朝義もウイグルの懐柔に腐心した。ウイグルは、戦局を左右する重要な鍵として最後まで安史の乱に関わり続けたのである。

第三章　安史の乱におけるウイグル・吐蕃以外の周辺諸国の動向

本章ではウイグルと吐蕃以外の周辺諸国を取り上げるが、諸国をその動向に従って分けると、①唐に援軍を派遣（于闐・抜汗那・大食・南蛮・吐火羅）、②安史陣営に兵力提供（契丹・奚）、③吐蕃の衛星国（南詔・党項）、④中立国（渤海・日本・新羅）の四つに分類できる。これら諸国が安史の乱にどう対処したかについて、諸史料及び先行研究に基づき以下にまとめる。尚、周辺国の援軍については〔表2〕も参照されたい。

（一）唐に援軍を派遣したウイグル以外の国々
―于闐・抜汗那・大食・南蛮・吐火羅―

（1）于闐（ホータン）

至徳元載（七五六）、于闐王の尉遅勝は国事を弟の曜に委任し、自ら五千の兵を率いて唐に来援した（『新唐書』于闐伝、『資治通鑑』巻二一九）。尉遅勝は安史の乱の勃発前、来朝して名馬と美玉を献上し、玄宗より宗室の娘を妻として賜った（『旧唐書』巻一四四尉遅勝伝、

『新唐書』巻一一〇尉遅勝伝)。唐王室の姻戚でもあった尉遅勝は、唐の恩顧に報いるため自ら援軍を率いて来たのである。于闐は安西四鎮の一つであり、至徳元載七月、粛宗が安西に徴兵を命じた為、尉遅勝はいち早く唐の募兵に応じ、至徳元載末、来援したと思われる。

(2) 抜汗那(フェルガナ)

粛宗は至徳元載九月、抜汗那に対し、西域諸国を廻って援軍を要請するよう命じた。抜汗那軍は、至徳二載正月、鳳翔で粛宗と合流した(『資治通鑑』巻二一八・巻二一九)。乱の勃発前の天寶三載(七四四)、玄宗は抜汗那に宗室の娘和義公主を降嫁させ(『冊府元亀』巻九七九)、天寶十三載(七五四)、抜汗那の王子薛裕が入朝し宿衛となった(『新唐書』巻二二一寧遠伝)[21]。親唐の抜汗那は于闐同様、恩義に報いるため援軍を派遣したのであろう。

(3) 大食(アラブ)

大食の軍は至徳二載、長安と洛陽の奪回戦に参戦した(『旧唐書』粛宗紀・巻一九八大食伝、『新唐書』巻二二一大食伝[22]、『資治通鑑』巻二一九、『冊府元亀』巻九七三)。稲葉穣氏は、アラビア語史料に基づき、この大食軍を中央アジアにいた反アッバース朝勢力が派遣した軍勢であろうと論考している[23]。

(4) 南蛮

南蛮の軍は至徳二載、長安と洛陽の奪回戦に参加した(『旧唐書』粛宗紀、『冊府元亀』巻九七三)。兵力は不明である。また、南蛮がどの国を指すかも不明である。粛宗は、至徳二載十一月壬申朔に下した勅書の中で南蛮の援軍を「雲南子弟」と呼んでいる(『旧唐書』粛宗紀)。雲南は南詔を指すが、南詔は安史の乱の勃発前より吐蕃の衛星国となり、乱の際には吐蕃と連繋して唐の西南辺境を襲撃している[24]。反唐の南詔が唐に援軍を派遣したとは考えられない。南蛮の援軍は、南詔以外の雲南の部族が派遣した軍勢ではないだろうか。

(5) 吐火羅(トカラ)

乾元元年(七五八)七月、吐火羅の葉護烏利多は西域九国の首領と共に来朝し、安慶緒を討伐したいと請願した(『新唐書』吐火羅伝、『唐会要』巻九九吐火羅伝)。吐火羅は天寶八載(七四九)、羯師(チトラル)が吐蕃と連繋して圧迫してきたので唐に救援を要請した。吐蕃の封じ込めを図っていた唐は、吐火羅の要請に応じて羯師王を捕縛した(『資治通鑑』巻二一六)。吐火羅は、唐の恩義に応える為に王が自ら来援したと思われる。

(二) 契丹・奚—安史陣営に兵力供給—

北東アジアの契丹・奚は、唐の北東辺の脅威であった為、平盧節度使と范陽節度使が対契丹戦を担当した。安禄山は、開元二十九年(七四一)以降、平盧節度使を務め、幾度か契丹・奚を攻略して降伏した契丹人・奚人を自軍に吸収していったが、中でも勇敢な者は自分の養子となし、曳落河という親衛隊に編入した(『資治通鑑』巻二一六)。契丹・奚の兵士は安史陣営の中核であり、安慶緒の時代、長安の占領軍は大部分が奚の兵士であった(『新唐書』巻二二五安慶緒伝)。しかし、契丹・奚の部族長の中には安禄山に敵対する勢力もあり、天寶十五載(七五六)五月には安禄山の本拠范陽を襲撃して牛馬や子女を略奪した。この時、安禄山は洛陽におり、范陽には数千の兵しか残っていなかった為、契丹・奚に大敗した(『安禄山事蹟』下巻)。契丹・奚は部族連合体という性質から、ウイグルや吐蕃のように国家単位で統

一的な行動を取らなかった。その為、安祿山の配下に組み込まれたものもいれば、安祿山にも唐にも属さず独自の行動を取る部族長達もいたのである。

(三) 吐蕃の衛星国―南詔・党項―

(1) 南詔

南詔は天寶九載(七五〇)、雲南太守張虔陀の苛政に反発し蜂起した。唐は天寶十載(七五一)～天寶十三載(七五四)、三度の南詔遠征を行うが、吐蕃の支援を得た南詔はこれを撃退し、唐は二十万もの兵力を喪失した。南詔遠征で多大な戦力を失った唐は、安史の乱の勃発時、無傷だった河西・隴右・朔方の軍隊に頼らざるを得なくなる。[25] 南詔は天寶十一載(七五二)正月、吐蕃から贊普鐘・東帝に任じられて吐蕃の衛星国となり、吐蕃と共に姚州(雲南省)や嶲州(四川省)を襲撃した。乱勃発後も、至徳元載九月に會同軍と越嶲軍を撃破し(『資治通鑑』巻二一八)、至徳二載には吐蕃の命令で嶲州と台登を襲撃した。[26]

(2) 党項(タングート)

党項は至徳年間の末(七五七)、吐蕃の命令で唐の西北辺を襲撃し(『新唐書』巻二二一党項伝)、[27] 広徳元年(七六三)には吐蕃軍に従って涇州(甘粛省)や奉天(陝西省)に侵攻し、長安も占領した(『旧唐書』巻一九六吐蕃伝、『新唐書』巻二一六吐蕃伝)。

(四) 中立国―渤海・日本・新羅―

渤海・日本・新羅は唐に対しても安史陣営に対しても援軍を派遣しなかったが、三国の間では外交的な駆け引きが見られ、渤海と日本は連繋して新羅と対立し、日本では五七九年、新羅征討計画が立案された。計画は、七六二年、中止となるが、渤海・新羅の外交政策にも影響を及ぼした。本節では、安史の乱の際の三国の動向に関する先行研究の成果をまとめる。

(1) 渤海

渤海の南西には安祿山政権があり、渤海に隣接する契丹・奚は安祿山に従軍していた為、渤海の近隣は安祿山の勢力圏であった。このため唐も渤海に安史陣営の牽制を期待し、安史勢力も唐も渤海の懐柔を図った。渤海は玄宗の時代、二十九回も唐に遣使し(『新唐書』巻二一九渤海伝)、唐とは親密な外交関係を保っていたが、安史の乱が勃発すると、渤海は安史勢力に近接するという地理的状況から戦禍に巻き込まれる事を危惧し、対外姿勢は慎重になった。即ち、至徳元載、安祿山と通謀した平盧留後事の徐帰道が、渤海に遣使し、安祿山討伐の為と称して四万の騎兵を派遣するよう要請すると、渤海は徐帰道の謀反を疑い、使者を抑留した。その後、安東都護の王玄志が徐帰道を誅殺し、乾元元年、粛宗の勅書を携えた使者を渤海に派遣して皇帝の帰京等を伝え、唐・渤海間の連繋強化を図ったが、渤海は王玄志の言葉を信用せず、使者を抑留した(『続日本紀』巻二一・天平宝字二年十二月)。[28] また、宝応元年、史朝義が渤海の懐柔を試みたが、渤海は史朝義に呼応しなかった(第二章で詳述)。同じ宝応元年、代宗は渤海王の大欽茂を国王となした(『新唐書』渤海伝)。渤海はそれまで唐から郡王号を与えられていたが、これ以降、新皇帝が即位する時に国王号を授与されるようになる。古畑徹氏は、代宗は渤海が唐よりの行動を取った褒賞として大欽茂に王爵を与えたと論考している。[29]

尚、渤海は新羅と険悪であった為、日本との通好に努め、日本に遣

使して安史の乱の情勢を伝え、日本を助けて遣唐使の入唐に協力する等した。この間に渤海が提供した情報は『続日本紀』に詳細に記録されている。渤海は安史勢力によって唐から遮断された為、乱の際の渤海情勢は『旧唐書』等の漢文史料に殆ど残っていない。それ故、『続日本紀』に記された渤海の情報は、安史の乱の際の渤海の動向や対外政策を知る上で重要な手掛りになっている。

（2）日本

天平宝字二年（七五八）十二月、渤海より帰国した遣渤海使の小野田守が、日本に安史の乱の情勢を伝えた事が契機となり、天平宝字三年（七五九）、藤原仲麻呂が主導で新羅征討計画を立案した。日本は造船・築城・兵士の軍事教練等に務めたが、計画は天平宝字六年（七六二）十一月、中止となる[30]。尚、先行研究では、新羅征討計画は日本と渤海の共同作戦であると考察している。渤海は安史陣営に近接しており、状況によっては戦争に巻き込まれ、新羅に背後を襲われる恐れがあったので、日本を新羅牽制に利用しようとした可能性もある。

日本はまた、天平宝字五年（七六一・上元二）、唐から帰国した高元度より、弓造りの為の牛角を調達するように、との粛宗の命令を受けた為、東海・山陰・山陽等に牛角七千八百隻を貢上させた（『続日本紀』巻二三・天平宝字五年十月辛酉条）。この二年前の乾元二年（七五九）、史思明が洛陽を再占領して勢力を盛り返した為、唐は大量の軍需品を消耗し、日本に調達を求めたと推測される。

（3）新羅

新羅は安史の乱勃発直後、唐に朝貢しなかったが、玄宗が蜀に滞在している事を知ると、至徳元載（七五六＝景徳王一五）成都に使者を派遣し、玄宗に朝貢して忠誠を示した。玄宗は喜び、自作の五言十韻詩を新羅王に賜った（『三国史記』新羅本紀九）。唐が至徳二載九月に長安を奪還すると、翌年の乾元元年（七五八）八月、新羅は朝貢し、粛宗は新羅使節を紫宸殿でもてなした（『冊府元亀』巻九七六）。新羅はまた乾元二年（七五九＝景徳王一八）、官庁や官職名を唐風に改正し、宝応元年（七六二＝景徳王二一）九月と広徳元年（七六三＝景徳王二二）四月に唐に遣使した（『冊府元亀』巻九七二、『三国史記』）。更に、宝応元年五月には五谷・鵂巖・漢城・獐塞・池城・徳谷（以上黄海道）に六城を構築して北辺の防備を強化した[31]（『三国史記』）。この様に新羅は唐に対して実際的な支援こそ行わなかったが、親唐を表明し、好意的中立を維持した。新羅は、渤海と日本の連繋強化や日本の新羅政策の硬化等に備え、唐との親睦関係を緊密化し、辺防も強化して有事に備えたと考えられる。

第四章　安史の乱の時の吐蕃の動向
（南詔・党項の動向も含む）

吐蕃は安史の乱の際、第三勢力となり、唐の弱体化を好機として河西・隴右を奪取し、乱の終息直後には長安を十五日間も占領した。吐蕃は南詔・党項とも連繋して唐を攻撃しており、本章では南詔と党項の動向も併せて見る。安史の乱前後の吐蕃の動向については〔年表2〕、吐蕃軍の占領地については〔地図2〕に各々まとめたので、参照されたい。

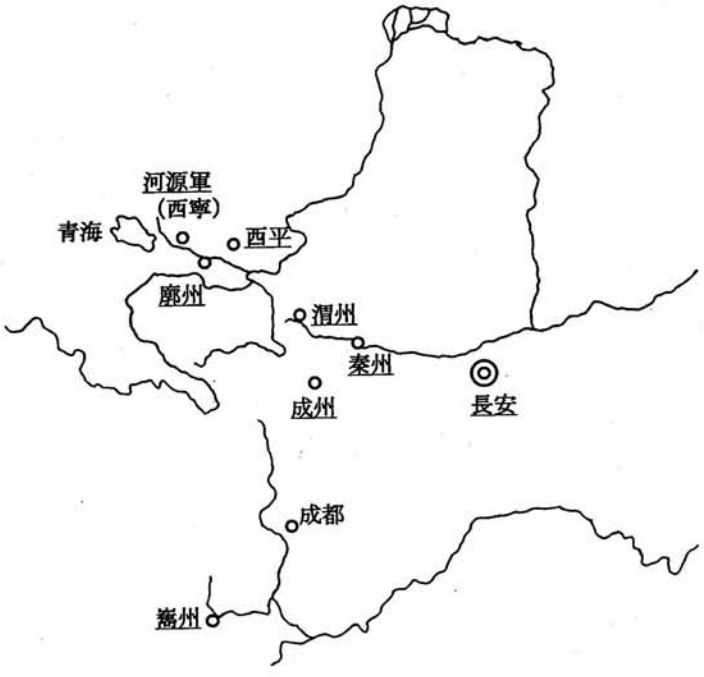
（一）七世紀後半～安史の乱が勃発する直前の吐蕃

七世紀初頭、チベット高原を統一した吐蕃は、貞観八年（六三四）、

〔年表２〕吐蕃の動向（安史の乱の前後）

年号	吐蕃軍の攻撃・侵攻、唐の反撃	唐・吐蕃の状況、和睦交渉
天寶６ (747)	高仙芝が小勃律を攻略し、親吐蕃派の小勃律王を捕縛 【唐が小勃律の支配権を掌握】	
天寶７	唐が青海に神威軍を創設して吐蕃軍を撃破	
天寶８ (749)	６月　唐軍が青海の要塞石堡城（吐蕃の軍事基地）を奪取【青海で唐軍が優勢となる】	
天寶９ (750)	高仙芝が羯師を破り、親吐蕃の王勃特没を捕縛後、玄宗が新王擁立【唐が羯師の支配権を掌握】	
天寶10 (751)	４月　剣南節度使の鮮于仲通が南詔に大敗 （南詔は吐蕃に支援要請していた）	
天寶12 (753)	唐軍が吐蕃を撃破して洪済・大漠門等の城と九曲を奪取。 吐蕃が南詔と共に姚州を奪取	
天寶13 (754)	６月　唐軍10餘万が南詔を攻撃するが、南詔・吐蕃連合軍に大敗	吐蕃王チデツクツェンが死去
天寶14 (755)	蘇毗が吐蕃から離反して唐に帰順	11月**「安史の乱」勃発。** 唐がチデツクツェンを弔問
天寶15 /至徳元 (756)	吐蕃が、威戎・神威・定戎・宣威・制勝・金天・天成等の諸軍、石堡城・百谷城・雕窠城、鄯州を陥落させる 【吐蕃軍が大規模に侵攻開始】	６月　吐蕃使節が「馬嵬の変」で唐軍に殺害される。 ８月　吐蕃が援軍派遣を唐に申し出る
至徳２ (757)	10月　吐蕃が西平（鄯州）を陥落させる。この年、南詔が吐蕃の命令で鄯州・台登を占領	２月　吐蕃が援軍派遣を唐に申し出る
758	吐蕃が河源軍を陥落させる	
760	吐蕃が廓州を陥落させる	
宝応元 (762)	吐蕃が臨洮・秦州・成州・渭州等を陥落させる	正月　**唐と吐蕃が長安で会盟（宝応会盟）** ６月　吐蕃の使者が入朝
広徳元 (763)	10月　**吐蕃が長安を占領**	３月　李之芳がラサに赴くが、吐蕃はこれを国境で抑留
建中２ (781)	２月　反側藩鎮の反乱［李惟岳・魏博の田悦・平盧の李納・山南東道の梁崇義］ 12月　徳宗が吐蕃に「敵国（対等）の礼」を承認	
建中４ (783)	**建中会盟**：正月　唐と吐蕃が清水で会盟　７月　唐と吐蕃が長安で再度会盟 **【徳宗は吐蕃軍による河西・隴右の実効支配を承認】**	

〔地図２〕吐蕃の襲撃地・占領地　※下線は吐蕃軍が襲撃もしくは占領した都市



初めて唐に朝貢し、貞観十五年（六四一）には文成公主が降嫁して唐と親善関係を築いた。だが、唐が総章元年（六六八）まで高句麗討滅戦に専念している隙に、吐蕃は積極的に西域への侵攻を開始した。このため七世紀後半、唐は西域の覇権を巡って吐蕃と争奪戦を繰り返したが、四度大敗した。八世紀になると再興した突厥が北辺の脅威となった為、唐は両面作戦を回避する目的で吐蕃と二度会盟（神龍会盟・開元会盟）し、公主の降嫁や国境劃定を行う等して吐蕃に譲歩し、西方情勢の安定化に務めた[32]。しかし、開元二十六年（七三八）以降、唐・吐蕃間は再び交戦状態となる。唐は、天寶八載（七四九）、青海の要塞石堡城を吐蕃から奪取する等して青海経由での吐蕃軍の進撃を阻止し（『旧唐書』巻一九六吐蕃伝、『新唐書』巻二一六吐蕃伝、『資治通鑑』巻二一六）、天寶六載（七四七）に小勃律（ギルギット）、天寶九載（七五〇）に羯師（チトラル）を各々吐蕃から奪取し（『新唐書』巻二二一小勃律伝、『資治通鑑』巻二一五・巻二一六）、パミールを経由する吐蕃の進撃路を遮断した[33]。この様に唐が天寶六載（七四七）以降、吐蕃の封じ込めに力を注いだ為、吐蕃は河西・隴右に入寇できなくなった。青海・パミールで進撃路を断たれた吐蕃は、打開策として、天寶十載（七五一）以降、反唐に転じつつあった南詔に軍勢を派遣した。天寶十一載（七五二）正月、南詔は正式に吐蕃に帰属し、天寶十二載（七五三）には南詔・吐蕃連合軍が姚州（雲南省）を奪取し、天寶十三載（七五四）六月には南詔に攻め込んだ唐軍十餘万を南詔・吐蕃連合軍が大破した。それでも、天寶十三載、吐蕃王チデツクツェンが重臣に暗殺されると[34]、玄宗は天寶十四載（七五五）、崔光遠をラサに派遣し、チデツクツェンを悼んだ（『旧唐書』吐蕃伝）。以上の様に、安史の乱勃発前の唐と吐蕃は和戦を繰り返していた。

（二）安史の乱勃発直後の吐蕃の動向

（1）河西・隴右・剣南への吐蕃軍の侵攻開始〔年表2〕〔地図2〕

安史の乱が勃発し、唐の辺境防備体制が緩むと、吐蕃は七五六年[35]（天寶十五／至徳元載）より、河西・隴右・剣南（四川）に対し大規模な侵攻を開始した。即ち、『資治通鑑』巻二一九によれば、七五六年（月日は不明）、吐蕃軍は、青海湖の東南にある威戎・神威・定戎・宣威・制勝・金天・天成等の諸軍、石堡城・百谷城・雕窠城の諸要塞[36]を次々に占領した。同じ七五六年（月日は不明）、吐蕃軍は嶲州（四川省）を攻撃した（『新唐書』巻六粛宗紀）。ただ、嶲州攻撃は南詔との共同作戦であり[37]、『資治通鑑』巻二一八によれば、南詔は至徳元載（七五六）九月に會同軍と越嶲軍を撃破しているので、吐蕃軍の嶲州攻撃も同じ頃に行われたと考えられる。吐蕃はまた、翌年の至徳二載（七五七）十月、西平郡（鄯州・青海省）を占領した（『旧唐書』粛宗紀）。

河西・隴右の防衛を担う唐軍は、安史の乱の勃発後、安禄山の西進を阻止する為に潼関の防衛を任されたが、天寶十五載（七五六）六月、安禄山に大敗し、壊滅的な打撃を被った。加えて粛宗が至徳元載七月、河西節度副使の李嗣業に出兵を命令し、河西・隴右の残存兵力を徴兵した為、同方面の防御力は更に低下し、吐蕃の侵攻が阻止できなくなったと思われる。

剣南（四川）方面の防備については、唐は嶲州を復置して吐蕃・南詔連合軍に対処したが、吐蕃が至徳二載（七五七）、南詔に命令して嶲州を再占領させ、台登も奪取させた為、剣南でも唐は苦戦を強いら

れた。また、吐蕃は至徳年間の末（七五七）、党項に対しても入寇を命じ、唐の西北辺を襲撃させた（『新唐書』巻二二一党項伝）。

（2）吐蕃による二度の援軍派遣の申し出

吐蕃は、至徳元載（七五六）八月、粛宗に対して援軍の派遣を申し出た（『旧唐書』粛宗紀）。また、翌年の至徳二載二月にも粛宗に遣使し、唐を助けて安禄山を討伐したいと申し出た（『冊府元亀』巻九七三外臣部助国討伐）。しかし、唐は吐蕃の二度の援軍派遣の申し出に対し、二度とも援軍を要請しなかった。唐が吐蕃に援軍を要請しなかった理由については、史料に記述がない。ただ、安史の乱後の事例ではあるが、徳宗は朱泚の乱の時（七八三～七八四年）、吐蕃に対し、安西四鎮と北庭を割譲する事を約して援軍を請願している[38]。安史の乱の際、吐蕃が援軍派遣の条件として唐に領土の割譲を要求した為、唐は吐蕃に援軍を依頼しなかった可能性も考えられる。

（3）「馬嵬の変」と唐軍による吐蕃使節殺害事件

天寶十五載（七五六）六月の「馬嵬の変」の時、吐蕃の使節団が唐軍によって襲撃され、全員が殺された。この事件については、『旧唐書』巻九玄宗紀・巻一〇六楊国忠伝、『新唐書』巻二〇六楊国忠伝、『資治通鑑』巻二一八・至徳元載六月丙申条に記されている。

以下に事件のあらましを記す。天寶十五載六月、蜀への逃走を開始した玄宗一行は、馬嵬駅で休息したが、付き従う兵士達は、飢えと疲労から楊国忠に対する不満と怒りを募らせていた。その時、吐蕃の使節二十餘人が、駅門の所で楊国忠を遮って陳情した。これを見た兵士達は「楊国忠が吐蕃と共謀して謀反を企んでいる」と誤解し、楊国忠を襲って殺し、吐蕃使節をも襲撃して全員を殺害した。この様に、吐蕃使節の殺害は「馬嵬の変」の契機となる重要事件であった。にもかかわらず、「馬嵬の変」の後、殺された吐蕃使節に関する記述は全く見られない。また、唐も使節殺害に関して吐蕃に謝罪していない。

馬嵬での吐蕃使節殺害事件については、あまり注目されてこなかったが、藤善真澄氏が興味深い見解を述べている[39]ので以下に簡単に紹介する。①馬嵬で殺された吐蕃の使節団は崔光遠の弔問に対する返礼の使節であり、ラサから長安に向かう途上、馬嵬で玄宗一行と遭遇した。駅役人が逃亡していたので、吐蕃使節は楊国忠に陳情したと思われる。②唐は使節殺害の件で吐蕃に報復される事を恐れ、吐蕃からの援軍派遣の申し出を辞退したのではないか。③吐蕃は使節殺害の件を知らずに七五六年八月、唐に援軍の派遣を申し出たが、この時、初めて使節が殺害された事を知り、報復として唐への侵攻を開始したのではないか。

以上が藤善氏の見解であり、筆者も氏の論考に賛同する。ただ吐蕃軍がこれまで唐の隙（高句麗遠征や突厥との戦い）に乗じて西域や河西・隴右に侵攻してきた点を考慮すると、仮に馬嵬での使節殺害がなかったとしても、吐蕃軍が侵攻を開始した可能性は考えられる。尚、吐蕃軍の侵攻開始の時期が分かれば、馬嵬の変との因果関係が明確になるかも知れない。

（三）安史の乱の終息前後の吐蕃の動向〔年表2〕〔地図2〕

（1）宝応会盟と吐蕃軍の河西・隴右占領

七五六年より始まった吐蕃軍の河西・隴右方面への進撃は、その後も続き、乾元元年（七五八）に河源軍（青海省西寧市）、上元元年（七六〇）に廓州（青海省）が吐蕃軍によって各々陥落させられた

（『資治通鑑』巻二二〇・巻二二一）。しかし、唐は河西・隴右に派兵して吐蕃軍に反撃する事ができなかった。唐は安史陣営との対戦に釘付けであり、吐蕃から占領地を奪還できるだけの余裕はなかったのである。そして、おそらくは、この様な吐蕃軍の絶えざる侵攻を憂慮しての事と推測されるが、粛宗は宝応元年（七六二）建寅月（正月）、吐蕃と会盟した。[40]この唐・吐蕃会盟を、本稿では会盟が行われた年の年号を取って「宝応会盟」と呼ぶことにする。

粛宗が吐蕃との会盟に踏み切った背景については、『新唐書』吐蕃伝に「使数来請和、帝雖審其譎、姑務紓患、乃詔宰相郭子儀、蕭華、裴遵慶等與盟。〔吐蕃はしばしば唐に和睦を請願した。粛宗は吐蕃の和睦要請が偽りだと悟ってはいたが、しばらくの間、災いを緩めたいと考え、[41]郭子儀・蕭華・裴遵慶らに吐蕃と会盟させた。〕」と記されている。「患（災い）」というのは、安史陣営との対戦（内憂）と吐蕃軍の侵攻（外患）を指すと考えられる。

宝応会盟については『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『冊府元亀』巻九八一外臣部盟誓・粛宗元年条に僅かながら記載があり、これらの漢文史料に基づき会盟で行われた出来事をまとめると、①唐と吐蕃が長安の鴻臚寺で会盟した事、②唐側の出席者は宰相の郭子儀・蕭華・裴遵慶であった事、③会盟は吐蕃の礼に従ってとり行われた事、の三点が分かる。会盟で定まった条項は不明であるが、唐が吐蕃の礼に則って儀式をとり行った点から唐が吐蕃に譲歩した事が窺える。佐藤長氏はチベット語史料（ポタラ碑文）も活用し、宝応の会盟の時、唐が歳賜（絹）を吐蕃に約束したと推察している。[42]この歳賜についてはチベット語史料（ポタラ碑文、敦煌年代記）に更に記載があり、粛宗の崩御により結局吐蕃に渡されなかった。[43]

宝応会盟と同じ年（宝応元年＝七六二）、月日は不明だが、吐蕃が臨洮・秦州・成州・渭州（以上甘粛省）を奪取している（『旧唐書』吐蕃伝）。佐藤氏は、吐蕃の攻撃は会盟締結後であり、唐が約束の歳賜を吐蕃に与えなかった事が進撃の口実にされたと論考している。[44]

以上の様に、宝応会盟は吐蕃軍の東進の歯止めとはならず、吐蕃は宝応会盟の翌年（広徳元年＝七六三）七月には河西・隴右を尽く占拠し（『資治通鑑』巻二二三）、十月には遂に長安を占領する。

（2）吐蕃の長安占領

広徳元年（七六三）正月、史朝義の自殺によって、七年余に及んだ安史の乱が終息した。しかし、唐が安史の乱の鎮定に専念している隙に吐蕃が唐の西北領土を侵食し、安史の乱が終息してから六ヶ月後の広徳元年七月、河西・隴右を尽く占領した。吐蕃軍は党項・吐谷渾・氐・羌などの諸族も従え、二十餘万の軍勢で、十月には涇州（甘粛省）・奉天・武功（以上陝西省）などに侵攻した。これに対し、唐側は、宦官の程元振が緊急事態を上奏せず、涇州刺史が吐蕃軍に降伏して先導となるなど不手際が続いた為、吐蕃軍は迅速に進撃を続け、長安に迫る勢いを見せた。代宗が驚愕して陝州（河南省）に逃亡すると、吐蕃軍は長安を占領し、広武王承宏を皇帝に推戴した。広武王承宏は、先代の吐蕃王チデツクツェンの妻金城公主の弟であり、先王の義弟という理由で吐蕃軍は傀儡に推戴したと思われる。吐蕃軍は皇帝推戴後、翰林学士の于可封や霍瓌（崔瓌）を宰相に任命し、百官を設置して改元した。また、吐蕃軍が府庫・市里を略奪して閭舎を焼いた為、長安中が蕭然とした（『旧唐書』吐蕃伝、『新唐書』巻八一広武王承宏伝、

『資治通鑑』巻二二三）。

この後、唐が反撃体制を整えて長安の吐蕃軍を包囲し、吐蕃軍は占領してから十五日目に長安を撤退した。だが、吐蕃軍による河西・隴右の占拠は依然として続き、唐は安史の乱終息後も同地を奪還できなかった。代宗は長安の西北に邠寧・鳳翔・鄜坊・涇原等の節度使を新たに設置し、防秋兵を関東（関内道と隴右道以外）から徴集して吐蕃の入寇に備えたが、徳宗の時代、唐は相次ぐ藩鎮の乱に苦慮し、建中四年（七八三）、吐蕃と会盟（建中会盟）を締結し、吐蕃による河西・隴右の実効支配を正式に承認して同地を放棄する。(45)

おわりに

最後に、安史の乱におけるウイグルと吐蕃の外交姿勢の相違について簡単な考察を加えた後、乱後の国際情勢を概観しながら、本稿を締め括りたいと思う。

八世紀前半の東部ユーラシアは大まかには、唐を中心として、西方に吐蕃、北方に突厥が勢力を有する非対称な三国鼎立の形勢であった。唐は二正面作戦を避ける為、武力の行使のみならず巧みな外交によって吐蕃と突厥に対処した。唐の外交戦略は一定の成果を収め、七四四年には突厥が滅亡し、七四七～七四九年には、吐蕃の勢力も大きく後退させた。しかし、その頃から王朝内の政争に連動した形で戦線が拡大し、七五一年には南方の南詔、北方の契丹、西方の大食に各々大敗し、対外政策に破綻を生じた状態で安史の乱へと至っている。

安史の乱の際には、多くの東部ユーラシアの国々が様々な形で参与した。それら諸国の中でもウイグルと吐蕃は安史の乱を契機に大きく勢力を拡大したが、この二国の唐に対する外交姿勢は対照的であった。ウイグルは、乱に苦しむ唐を強力に支援し、その結果、唐から可汗として冊立され、唐の公主も降嫁し、褒賞として大量の絹も得て、国力が大きく増強した。一方、吐蕃は唐の混乱に乗じて唐の西方領土に侵攻し占領した。

ウイグルは七四四年に建国したばかりの新興国であり、建国以来一度も入寇せず毎年の様に唐に朝貢する等、唐との親善外交を維持してきた。それに対して、吐蕃は、既に百年近く唐との間で和戦を繰り返し、唐が対外戦争に専念している隙に侵攻しては領土の拡張や東西交易路の奪取を試みてきた。こうした両国の対唐政策の違いが、乱の際の両国の外交姿勢の違いに繋がったと考えられる。

また、新興の遊牧国家であるウイグルは、土地（領土）に対する執着よりも、むしろ、北方の遊牧諸族に対する権威付けを欲していた。北方の支配が固まっていない状況下では、長期に亘って君臨した正統な中華王朝である唐からの官職授与や冊立、公主の降嫁は、充分に魅力的であり、それがウイグルが唐を支援する動機の一つになったと考えられる。一方、吐蕃は、農耕牧畜を生産基盤とする領土国家であり、領土的野心が非常に強く、実際、七世紀後半以降、幾度も唐と本格的な戦争を行い、唐の西方辺境への侵攻を繰り返し、要塞を築く等その地の占領を試みてきた。吐蕃にとっては、安史の乱は領土拡大の絶好の機会であった。

安史の乱の終息後、東部ユーラシアの構図は大きく変貌し、西の吐蕃、北のウイグルが強大化して唐・吐蕃・ウイグルの三国が鼎立する形勢となり、それが流動的に一世紀近くも続く。吐蕃は乱後も河西・

隴右を占領し続け、ウイグルも安史の乱の際の功を誇って高圧的になり、いずれも唐の脅威となった。乱後の唐は国内にも反側藩鎮を抱え内憂にも苦慮したが、これに外交的要素が複雑に絡まっていく。七八一年二月、河北の反側藩鎮は唐の財政再建と削藩政策に反発し、連合して蜂起し唐に反抗したが、その際、ウイグルは反側藩鎮の側に援軍を送っている。この時期、西方への対処として徳宗は吐蕃と和睦し、七八一年十二月、吐蕃に敵国（対等）の礼を認め、七八三年（建中四）には建中会盟を結んで吐蕃による河西・隴右の領有も正式に承認した。しかし藩鎮の乱は連鎖的に拡大し、七八三～七八四年、朱泚が蜂起して長安を占領した為、徳宗は吐蕃に対し、領土の割譲等を条件に援軍を請願した。吐蕃は援軍派遣を承諾するが、朱泚の賄賂を受けて撤兵し、七八七年の平涼偽盟では唐の使者を捕縛した。吐蕃のこうした背信行為等が原因で、唐・吐蕃間の対立は決定的となり、唐は吐蕃牽制の為にウイグルとの親善強化を試みる。安史の乱後のウイグルは、時には長安で暴力事件を起こし、河北三鎮を支援して唐を苦しめる事もあったが、唐にとっては外交と経済の面で重要な隣国であった。ウイグルは唐との絹馬交易を重視し、唐もまた、隴右にあった良質な牧馬・監牧を吐蕃に奪われ馬不足に陥っていた為、軍事的にもウイグルの馬が必要であった。ウイグルは、東西交易路の要衝北庭の領有を巡って吐蕃と対立しており、反吐蕃という点で唐とは外交上の利害が一致した為、徳宗は七八八年、ウイグルに公主を降嫁させ、可汗との親睦を強化した。唐はまた、吐蕃の圧政に対して反感を抱き始めた南詔も懐柔し、七九四年、南詔と会盟し、唐・ウイグル・南詔は連繋して吐蕃包囲網を形成する。(46)

この様に、安史の乱後の唐は内憂外患に対応する為に再び外交を重視するようになったが、対外勢力への依存度は、より強くなり、唐は支援を得る為、対外勢力に対して大きく譲歩する事も辞さなくなった。また、反側藩鎮は唐に反抗する為に対外勢力と、ウイグル・南詔は吐蕃に対抗する為に唐との連繋を各々試みた。この為、乱後の国際情勢は、より複雑な様相を呈するようになる。

本稿で見てきた様に、安史の乱は東部ユーラシア諸国の多くが参与した世界史上の大乱であった。中国王朝の内乱において周辺諸国が介入し、正統な中国王朝を支援してその勝利に大きく貢献した例は極めて稀である。その意味で、安史の乱は中国史上でも極めてユニークな大乱であった。そして、中国史上、この大乱が転換点となって、それ以後、宋・元・明・清と周辺諸民族が強勢となり漢民族を圧迫する構図へと大きく変化していくのである。

註

（1）E・G・プーリィブランク「安禄山の叛乱の政治的背景」（『東洋学報』三五巻二号、一九五二）、同「安禄山の叛乱の政治的背景（下）」『東洋学報』三五巻三・四号、一九五三）、谷川道雄「安史の乱の性格について」（『名古屋大学文学部研究論集』八号、史学三、一九五四）、藤善真澄『安禄山』（人物往来社、一九六六。二〇〇〇年に中公文庫より再版）。

（2）佐藤長『古代チベット史研究』下（東洋史研究会、一九五九）、森安孝夫「ウイグルから見た安史の乱」（『内陸アジア言語の研究』一七号、二〇〇二）、古畑徹「渤海王大欽茂の「国王」進爵と第六次渤海使―渤海使王新福による安史の乱情報の検討を中心に」（『集刊東洋学』一〇〇号、二〇〇八）。

（3）森安孝夫『シルクロードと唐帝国』（講談社、二〇〇七）、森部豊

『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』（関西大学出版部、二〇一〇）。

（4）森安(2)論文一三〇～一三一頁。

（5）拙稿「安史の乱直前の唐の外征及び対外政策―七五一年の三つの大敗に象徴される唐の内政・外政の異常化の様相」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』一〇号、二〇一一）参照。

（6）羽田亨「唐代回鶻史の研究」（『羽田博士史学論文集』上巻・歴史篇、東洋史研究会、一九五七）、森安(3)文献。

（7）林俊雄「ウイグルの対唐政策」（『創価大学人文論集』四号、一九九二）。例えば、『冊府元亀』巻九七一外臣部朝貢四によれば、ウイグルは、天寶十載（七五一）、天寶十一載（七五二）、天寶十三載（七五四）に唐に朝貢している。

（8）『旧唐書』では毗伽闕可汗、『新唐書』では葛勒可汗・磨延啜と表記されている。

（9）『旧唐書』では登里可汗、『新唐書』では牟羽可汗・移地健と表記されている。

（10）森安孝夫・鈴木宏節・齊藤茂雄・田村健・白玉冬「シネウス碑文訳注」（『内陸アジア言語の研究』二四号、二〇〇九）、羽田(6)論文一九八～二〇〇頁参照。

（11）至徳二載（七五七）二月、粛宗が鳳翔で諸軍と合流した時、李泌は先に范陽を奪取すべきと進言したが、粛宗は両京を先に奪還すべしと主張した（『資治通鑑』巻二一九）。

（12）『新唐書』于闐伝については小谷仲男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注（一）」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』九号、二〇一〇）一二一～一二四頁。

（13）粛宗の行在は時期によって異なる。『旧唐書』巻十粛宗紀によれば、粛宗は至徳元載（七五六）七月、霊武で即位し、九月戊辰、彭原に移動した。至徳二載（七五七）正月甲子、保定郡（甘粛省）に移り、二月戊子、鳳翔（陝西省）に移動している。

（14）『旧唐書』粛宗紀、『冊府元亀』巻九七三外臣部助国討伐、『資治通鑑』巻二一九では兵力や戦場等が異なるが、本稿は『旧唐書』郭子儀伝に従う。森安(2)論文一三〇～一三一頁参照。

（15）長沢恵「中国古代の和蕃公主について」（『海南史学』二一号、一九八三）、藤野月子「唐代の和蕃公主をめぐる諸問題について」『九州大学東洋史論集』三四号、二〇〇六）。

（16）唐・ウイグル間の絹馬交易については、林(7)論文、斎藤勝「唐・回鶻絹馬交易再考」（『史学雑誌』一〇八巻一〇号、一九九九）等を参照。

（17）『新唐書』吐火羅伝については、小谷仲男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注（二）」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』一〇号、二〇一一）一六一頁。

（18）『旧唐書』廻紇伝に「宝応元年、代宗初即位、以史朝義尚在河洛、遣中使劉清潭徴兵於廻紇、又修旧好。其秋、清潭入廻紇庭、廻紇已為史朝義所誘、云唐家天子頻有大喪、国乱無主、請発兵来収府庫。可汗乃領衆而南。」とある。

（19）『続日本紀』巻二四・天平宝字七年正月庚申条に、渤海（高麗）大使王新福の報告として、「李家太上皇・少帝並崩、広平王摂政……史家朝儀、称聖武皇帝、性有仁恕、人物多附、兵鋒甚強、無敢当者。〔李家（唐王朝）では太上皇（玄宗）と少帝（粛宗）が崩御し、広平王が摂政を務めている。……史家の朝義は聖武皇帝を称し、性質は寛仁宥恕で多くのものが付き従い、兵力は強く、敵対する者はいない。〕」と見える。古畑(2)論文は、この情報が、史朝義がウイグルにもたらした情報と同じである点、史朝義の優勢を語っている点から、史朝義が渤海に伝えた情報であろうと考察している。

（20）例えば、宝応元年、史朝義との対戦前、右金吾大将軍の長孫全緒が代宗に対し、「回紇短於攻城、持久勢且沮。（ウイグルは攻城戦が苦手なので持久戦になると勢いが挫かれます。）」と進言した為、唐は短期戦で史朝義に挑んだ（『新唐書』巻二二五史朝義伝）。

（21）フェルガナは天寶三載（七四四）、玄宗により国名を寧遠に改められた。『新唐書』寧遠伝については小谷・菅沼(17)論文一八一～一八四頁。

（22）『新唐書』大食伝については小谷・菅沼(17)論文一五八頁。

(23) 稲葉穣「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」(『国際文化研究』五号、二〇〇一)。
(24) 藤澤義美『西南中国民族史の研究―南詔国の史的研究』(東京・大安、一九六九)、大原良通『王権の確立と授受―唐・古代チベット帝国(吐蕃)・南詔国を中心として』(汲古書院、二〇〇三)、林謙一郎「南詔王権の確立・変質と唐・吐蕃関係」(『唐代史研究』一二号、二〇〇九)参照。
(25) プーリィブランク(1)論文(下)一四二頁。
(26) 注(24)参照。
(27) 『新唐書』党項伝については、小谷・菅沼(12)論文八五~九二頁。
(28) 日野開三郎「安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗国占領」(『東洋史学論集』第八巻、三一書房、一九八四)。
(29) 古畑(2)論文。
(30) 日本の新羅征討計画については、和田軍一「淳仁朝に於ける新羅征討計画について(第一回・第二回)」(『史学雑誌』三五巻一〇号・一一号、一九二四)、石井正敏「初期日渤交渉における一問題―新羅征討計画中止との関連をめぐって―」(『史学論集 対外関係と政治文化』一、吉川弘文館、一九七四。『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、二〇〇一年に再録)、酒寄雅志「八世紀における日本の外交と東アジアの情勢」(『国史学』一〇三号、一九七七。『渤海と古代の日本』校倉書房、二〇〇一年に再録)、河内春人「東アジアにおける安史の乱の影響と新羅征討計画」(『日本歴史』五六一号、一九九五)参照。
(31) 安史の乱の際の新羅は『三国史記』新羅本紀九・景徳王十五年(七五六)~二十二年(七六三)(井上秀雄訳注『三国史記』一巻、平凡社、一九八九年、二九七~三〇一頁)参照。
(32) 七世紀~八世紀前半の吐蕃については佐藤長『古代チベット史研究』上(東洋史研究会、一九五八)、森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」(『金沢大学文学部論集・史学科篇』四号、一九八四)、菅沼愛語・菅沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き」(『史窓』六六号、二〇〇九)。拙稿「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢」(『史窓』六七号、二〇一〇)、「唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義―安史の乱以前の二度の会盟を中心に」(『日本西蔵学会々報』五六号、二〇一〇)参照。
(33) 佐藤(32)論文、森安(32)論文、拙稿(5)論文五七~五九頁を参照。『新唐書』小勃律伝は小谷・菅沼(17)論文一五九~一六〇頁参照。
(34) 佐藤(2)論文五〇三~五〇七頁。
(35) 『資治通鑑』では至徳元載と書かれているが、これは改元後の七月以降を表すとは限らない。というのも、『資治通鑑』は七五六年を全て至徳元載と記しているからである。
(36) 佐藤長『チベット歴史地理研究』(岩波書店、一九七八)。
(37) 藤澤(24)論文三〇〇~三〇一頁、五五九頁。
(38) 拙稿「徳宗時代の三つの唐・吐蕃会盟(建中会盟・奉天盟書・平涼偽盟)―安史の乱後の内治のための外交」(『史窓』六八号、二〇一一)。
(39) 藤善真澄『安禄山と楊貴妃―安史の乱始末記』(清水書院、一九八八)一七五~一七六頁、一八三~一八四頁。
(40) 粛宗は、七六一年(上元二)九月から七六二年四月まで年号を使用しなかった為、会盟の行われた七六二年正月の時点で年号はなかった。この為、会盟の行われた年月を『旧唐書』吐蕃伝は「粛宗元年建寅月甲辰」、『冊府元亀』巻九八一盟誓は「粛宗元年建寅月」と記している。宝応と改元されたのは七六二年四月であるが、本稿では便宜上、七六二年正月に行われた会盟を宝応会盟と称する。
(41) 佐藤長「吐蕃伝訳注」(『騎馬民族史3―正史北狄伝』平凡社、一九八八)二四六頁も参照。
(42) 佐藤(2)論文五二四~五二五頁。佐藤氏はポタラ碑文の該当箇所を「シナ君主へウキワンテ(孝感皇帝=粛宗)は君臣ともに恐れ、年ごとに常に貢物として絹、織物五万を捧げ、シナは貢物を支払わしめらるることとなれり。その後シナ君主御父へウキワンテ(粛宗)は逝き、シナ君主御子ワンペンワン(広平王=代宗)王としてありしが、チベットに貢物を支払うこと能わず。」と訳している。

(43) 佐藤(2)論文五二四～五二五頁。佐藤氏はチベット語年代記の虎の年（七六二年）の該当箇所を「晩冬シナの君主（粛宗）は逝きてシナの君主（代宗）新たに立ちたり。絹の貢物と地図等献上することと能わず〔シナの〕国家は崩壊せり。」と訳す。注(42)参照。

(44) 佐藤(2)論文五二六～五二七頁。

(45) 拙稿(38)論文。

(46) 徳宗時代の唐・吐蕃会盟は注(38)、唐・ウイグル間の絹馬交易は注(16)参照。